

フランス語と日本語における名詞

マスロン ジャン = フランソワ (坂井弘由訳)

文学部 家政学部 フランス語講師

(2001年9月13日 受理)

SUR LE SUBSTANTIF EN FRANÇAIS ET EN JAPONAIS

Jean-François MASSERON

Faculté des lettres assistant de français

(Received September 13, 2001)

日本人の学生がフランス語の冠詞の用法を理解し、使いこなせるようになるための作業をしている時、私は次のことに気づきました。注1一般に「冠詞が間違っている」と考えられている場合、その多くは、実際には、使用している名詞の正しい意味を学習者が理解していないことが原因ではないかということです。したがって、私は、間違った名詞の使い方をしているから、学習者が冠詞の誤りを犯すのではないかと考えるようになりました。また、日本人にとって、フランス語の名詞の意味を正しく理解することがいかに困難であり、日本人向けのフランス語の教科書においてさえも、そのことが取り上げられていないことに、私は気づきました。これでは、まるで、名詞の性や複数形のような語形変化に関する諸問題を別とすれば、フランス語の名詞と日本語の名詞が、言語学的にも論理的にも、同一の現実を指し示しており、コミュニケーションにおいて、同一の機能を果たしていると主張しているようなものです。

したがって、私は、学生達から集めた様々な実例を基に、名詞を正しく理解していないために起きる間違いについて考察したいと思います。

1 名詞と冠詞

和文仏訳の問題から、次の二つの例を検討しましょう。

- (1) Les USA entretiennent des rapports commerciaux avec **les* francophonies.
- (2) Je voudrais déposer **le* yen japonais qui me reste.

イタリック体の語の前の*印の箇所に間違いがあると考えられます。

フランス語を母語とする話者なら、次のように直します。

- (1') Les USA entretiennent des rapports commerciaux avec LA Francophonie.
- (2') Je voudrais déposer LES yens qui me restent.

ただ、教育学的配慮から、とりあえず、冠詞はそのままにしておき、名詞を次のように直す方がよいと思います。なぜなら、冠詞についての考え方は正しいのですから。

(1”) Les USA entretiennent des rapports commerciaux avec les PAYS FRANCOPHONES.

(2”) Je voudrais déposer l'ARGENT japonais qui me reste.

名詞についての間違い以前に、私が注目するのは、冠詞の選択の正しさです。つまり、学生は、意識的にせよ無意識的にせよ、定冠詞を選んでおり、そのことは評価すべきです。日本人にとって、冠詞は大変難しい問題であり、自国語の類似した構造からの類推が成り立たず、話者の気分によって決まるわけではないけれど、何か謎めいた体系に従うしかないのです。その仕組みは、微妙で、非常に抽象的であり、冠詞を選ぶ際に、言語の深部において通常は意識されることのない規則に従うことと、文脈によってその都度変化し、場合によっては、自分の考えを表すために、話者の自由に任されることを、明確に区別するのは非常に難しいことなのです。

以上のような理由から、私は、添削する時は、考え方が正しければ、学生の選んだ冠詞を残すようにしています。上記の(1)と(2)の場合では、名詞の意味の誤解から生じた間違い、つまり、単数と複数の逆転を除けば、冠詞についての考え方は、正しいのです。ここで適切なのは、定冠詞だけです。なぜなら、francophonie(フランス語圏)とは、世界にただひとつだけしか存在しない集合体だからですし、yen(円)は、この文脈では、“qui me reste”(手元に残っている)という修飾語句によって、ただ一つの集合体だと考えられるからです。フランス語で定冠詞を用いるのは、名詞がある物または物の集合を指し示していて、ただ一つしか存在しないか、あるいは、全体を一まとめにして、その時の言行の枠内で対象となる事物を画定し、その事物が存在するかどうかではなく、話者にとって、その時の状況によって特定されているか、あるいは、特定し得る事物である場合です。

(1)の文においては、学生が頭の中で考えている *les francophonies とは les pays francophones (フランス語を話す国々) のことであることは、明瞭です。

1 - 1 集合的単数

Francophonie フランス語圏は、いわゆる集合的単数の例です。LA FRANCOPHONIE とは、フランス語を話す国の集合です。それは、精神が作り上げた抽象であり、一種のショートカットです。ただ一つの名、つまり、観念の下で、様々な事物をまとめ上げて、それらの共通点の一つ、「フランス語を話す」を前面に押し出しているのです。

他にも、観念のショートカットがあります。たとえば、UNE douzaine d'oeufs は、12個の卵のことです。LA douzaine (que j'ai achetée) ce sont LES douze oeufs (que j'ai achetés) 教科書の初めのページから、学生は、そのような名詞でつまづきます。

(3) J'aime la culture et *le film français.

(正しくは、LE cinéma または Les films です。なぜなら、la culture (文化)と同じように、LE cinéma (映画)は、集合名詞であり、抽象名詞的でもあります。また、映画の集合を指し示す時に使われる、数えられない名詞です。)

*mes familles に会えることは、めったにありません。反対に、よく会えるのは *mon または *ma parent や *ma amies です。これらは、単なる不注意による間違いであって、意味はない

のでしょうか。それとも、友達は何人かいるけれども、一つの集合を成していることを、裏で表しているのでしょうか。この種の間違いが、大学3年生や4年生の答案に登場するたびに、私は後者の仮説を排除できないのではないかという気持ちになります。

Cuisine と plats も誤解されやすい語です。

(4) J'aime la *cuisine de poisson (正しくは, J'aime LE poisson)

(5) Nous avons mangé des *plats français (正しくは, DE LA cuisine française).

こうした間違った文の背後に、日本語の単語や文の組み立て方、あるいは、機械的な直訳が見え隠れしています。私は、そこから、無視することのできない教育学的教訓を二つ引き出す必要があると思います。

初期の段階から、比較文法を少し教える。つまり、学生たちに、自分たちが日本語ではどのように考えていて、どのように変形すれば、その考えをフランス語で言えるのかを、考えさせる。

新しく習った語を、文脈に合わせて、互いに関連付けて分類することを教える。たとえば、UN cinéma とは、Des films を見る建物または場所である。LE cinéma とは、娯楽であり、LE cinéma japonais とは、TOUS LES films japonais のことだなど。ただ、このような理論的な学習法だけでは、成果は得られない。それに加えて、機械的の反復練習や、丸覚えすればそのまま使える表現も教える。ただし、もちろん、学生は、それらの文の意味、前提となっている文脈、文が表している意図なども正しく理解している必要がある。たとえば、je suis allé au cinéma, j'ai vu un film français, j'aime le cinéma français.

学生達は、語の意味を、日本語でそれに相当する語の意味に限定しがちなので、それぞれの語に固有の構文上の決まりごとを持ち込まないよう指導する。

1 - 2 加算名詞

次の文は、ある日本人女性が、あるフランス人男性に宛てた年賀状の一部です。

(6) * *Votre kanji est magnifique!*

すぐに気づくのは、kanji が単数であることです。女子学生が言っている kanji とは、年賀状に書かれている住所のことです。ただ、そこには、一つ以上の kanji が書かれています。

彼女は、kanji という語をどのように理解しているのでしょうか。おそらく、kanji による筆記法または kanji の書き方という意味でしょう。

(6)と(2)を比較してみると、フランス人にとっては、yen と kanji は、数えられる名詞であることは、議論の余地がありません。つまり、それらは、一つ、二つという単位で考えられているのですが、ここでは単数で用いられています。これでは、まるで、それらの名詞が総称として使われているようでもあり、物質名詞として捉えられているようにも見えます。学生達は、次のような文では間違えることはありません。

(7) Mon fils doit apprendre trois nouveaux kanjis par jour.

(8) Ça coûte 500 yens.

以上のことから、次の仮説が導かれます。数字が明示されている場合は、日本人は、数えられる名詞は、数えられる名詞として使うということ、つまり、数詞や冠詞 UN/DES を正しく付けるけれども、数字が明示されていない場合は、定冠詞 LE を使う傾向があり、その結果、叙述内容が抽象的な感じになり、加算（数えられる）名詞が、総称的あるいは不可算（数えられない）名詞みたいになってしまいがちです。

それに対して、フランス人は、ちょうど逆向きの反応を示すように思われます。加算名詞が総称的に使われるためには、その場の状況とは全く何の関係もない、完全に一般的な文脈が必要です。言語学者の Francis Corblin の挙げている次の例を比べてみましょう。注2

- (9) Le matin, un client vient toujours me déranger.
- (10) Le matin, un homme a toujours du mal à se lever.

Francis Corblin 指摘によると、(9)の文では me があるので、un client は、総称的用例とは解釈されず、その文は、ある個別の事実を述べています。一方、(10)の文では、ある個別の状況が記されていないので、un homme は、総称的、つまり、すべての人、誰でも、の意味に解釈されます。

具体的には、yen が、総称的用例だと考えられるのは、次のような抽象的な文脈の中だけです。

Le yen a monté face au dollar et à l'euro.

要するに、フランス語では、その場の状況をどのように見るかということが優先されるのです。

1 - 3 成句

たいていの学生は、何となく、prendre LA douche と言ってしまうのですが、フランス語を、母語とする者なら prendre UNE douche と言います。

prendre la douche という言い方は、ありません。ただ、prendre le petit déjeuner とか prendre l'avion などの言い方はあり、教科書の初めの方で習います。おそらく、学生達は、それから類推して、prendre + LE/LA + 名詞という並び方が規則的なもので、文脈は関係ないと考えられるでしょう。

なぜ、フランス人が、douche という語を、加算（数えられる）名詞と感じているかを理解することは難しい問題です。私には、いくつかの理由が思い当たります。まず、douche というのは、時間的に「限界あるもの」だと考えられています。つまり、蛇口を開けてから、それを閉めるまでの間です。この「限界あるもの」という考え方は、フランス語では、重要な役割を演じています。「限界あるもの」を感じるからこそ、「無際限なもの」が可能なのわけですし、総称的・非時間的なものが見えてくるのではないのでしょうか。

しかし、もちろん、よくあることですが、文脈が変われば、名詞の捉え方も変わり、冠詞もそれに応じます。場合によっては、prendre LA douche という表現が可能あるいは適当だと言えるかもしれません。たとえば、温泉療法を受けていて、シャワーが、プログラムの中に組み込

まれている場合や、体が汚れるような仕事をしている人が、労働を終える前に、シャワーを浴びることを習慣にしている場合などです。この二つの例では、シャワーは、組み込まれています。シャワーを浴びることの習慣性や繰り返しは、「限界あるもの」という枠を取り払うことも可能です。また、シャワーは、特定されることもあります。たとえば、シャワーを浴びることを予定している場合、prendre LA douche という表現は、二通りに理解することができます。一つ目は、成句として、動詞 se doucher の同義語になり、定冠詞 LE は、総称的用法となります。二つ目は、二つの語が密接に結びついていると考えられ (prendre quoi? 浴びるって、何を? - LA douche habituelle いつものシャワーだよ)、冠詞 LE は、特定の用法と考えられます。

どの教科書にも書かれていないのですが、学生達にとって難しいのは、同じ一つの表現が、成句になっていることもあれば、それぞれの語がそれなりの意味を持っていて、動詞と目的語というように、はっきり別の語の組み合わせになっていることもあります。aller à l'école という表現は、文脈によって、「生徒であること」、「今は、夏休みではないこと」、「学校に行く途中であること」などと理解されます。学生達は、日本語に引きずられて、成句を優先させることがよくあります。たとえば、次のような間違いを、全く同じ形で、二回見つけたことがあります。一つは、入門者が書いたもので、もう一つは、上級者が書いたものです。

(11) Merci de m'envoyer *e-mail plusieurs fois

(正しくは、Merci de m'avoir envoyé plusieurs e-mails, もっと良いのは、Merci de/pour vos e-mails).

この例では、送信する行為が複数になっていますが、e-mails を複数にする方がフランス語らしいのです。e-mail が加算(加算名詞)であることがここでも気づかれていないようです。さらに、別な形での日本語の影響が現れています。何か行為が進行しつつある場合、日本語では、その原因に注目することが多いのですが、フランス語では、むしろ、結果に注目します。学生達の間違いを含む文が言い表しているのは、送信するという行為の繰り返しです。フランス語らしい文が言い表しているのは、その行為の結果の方であり、それが、パソコンの中に到着するメールの形になって現れるのです。

行為の『後』よりも『先』が優先される例は、

次のような質問に見られます。

(12) votre chambre a-t-elle été climatisée ?

(文脈から、質問は、きっと、Votre chambre est-elle climatisée ? あるいは、Avez-vous la climatisation ? だったと思われます。)

1 - 4 制約と自由

学生達は、確実さを好みます。一つの考えには、一つの言い方だけが対応することができ、また、そうでなければならぬと考えています。しかし、言語というのは、次の例文が示すように、制約でもあり、自由でもあるのです。食事の最後の場面を想像してみましょう。ある人が他の人たちに尋ねます。

(13) Vous voulez du café?

- (14) Vous voulez un café?
- (15) Vous voulez des cafés?
- (16) Vous voulez le café?
- (17) Vous voulez les cafés?

一つの同じ考えを五通りの形式で表現した上の文は、文法的に見ても、意味伝達的に見ても、どれも正しいものばかりです。どんな違いがあるのかを考えてみましょう。

(13)の文では、部分冠詞 *du* は、量と中身を抽象的に取り上げ、表現しているのは、物質だけです。VOUS という代名詞は、単数でも複数でも構いません。(14)の文では、話者は、招待客一人一人を視野に入れ、「はい」と答えた人たちのそれぞれの前には、コーヒーが一杯づつあります。(15)の文では、複数のカップに入ったコーヒーが、次から次と目に入ります。代名詞 VOUS は、当然、複数です。なぜなら、一人の人に複数のコーヒーを出すことはないからです。(16)と(17)では、定冠詞が使われているのですから、わかっているものを示しています。とすると、後でコーヒーを飲むことがあらかじめ言ってあったとか、この人たちは、今レストランにいて、コーヒーは定食の中に含まれているとか、食後にコーヒーを飲むことが習慣になっていることなどを前提しなければなりません。あるいは、こうも考えられます。コーヒーは、すでに準備されていて、質問の意味は、そこに見えているコーヒーを示して、「あのコーヒーを今お持ちしましょうか」ということかもしれません。(16)では、コーヒーは、切れ目のない、連続した物質として意識されているのに対して、(17)では、コーヒーを飲む人と同じ数のコーヒー茶碗に分けて入れた、非連続なものとして意識されています。(16)では、代名詞 VOUS は、単数でも複数でも構いません。(17)では、VOUS は、複数ですが、試飲をしていて、一人の人が何種類かのコーヒーを飲むのなら、話は別です。

ただ、五通りの答えが可能だというのは、やはり、まれなことです。それは、使われている名詞が *café* コーヒーだからであって、*riz* 米、*haricot* 豆、*raisin* ぶどう、*lapin* 兎などに置き換えると、そうはいきません。

café コーヒーは、まず、液体として、連続的、つまり、数えられない名詞として意識されます。しかし、コーヒーは、普通、*tasse* 茶碗に入れて出すものですから、いつのまにか、*tasse* 茶碗は、数量の単位になりました。*vin* ワインの場合は、違います。レストランでは、量(グラス、小瓶、瓶)、品質(ワインの銘柄)を指定せずに、ワインを注文することはできません。文法は、これらのデータに依拠しています。*riz* 米は、フランス語では、*farine* 小麦粉や *sable* 砂と同じように、連続した物質と意識されています。*haricot* 豆は、不連続で、数えられる名詞です。*raisin* 葡萄は、物質名詞で、数え方が二つあります。*grain* 粒と *grappe* 房です。

フランス語の語彙におけるこのような『ちぐはぐさ』に対して、フランス人は、ある種の論理を感じているのですが、日本人の学生には、それを捉えることはできません。だからこそ、改めて、文脈の中で単語を学ぶ必要があるのです。でも、学生たち、特に初心者には、体系全体の複雑さを見せると、やる気をなくさせる恐れがあります。したがって、基準点となるような表が役立ちます。

1 - 5 まとめ

どんな文法書や教科書にもある，次のような冠詞の表は，語形变化的な分類に基づくものです。

	定冠詞	不定冠詞	部分冠詞
単数	le, la (l')	un, une	du, de la(de l')
複数	les	des	-

このような表は，必要ですが，もっと必要なのは，それを乗り越え，コミュニケーションの視点から冠詞を分類し直すことです。Henri Bonnard は，次のような表を提案しています。注 3

	非決定的意味	決定的意味
非連続	Un oeuf, des oeufs	l'oeuf, les oeufs
連続	de l'eau	l'eau

この表の利点は，フランス語を話すときには，いつでも，必ず明確に示さなければならない二つの大きな区別の組み合わせが，一目瞭然だという点です。つまり，連続か非連続(これは，名詞の持つ性格によって決まります)かという区別と，非決定的か決定的(これは，発話の状況と，話者の自由によって決まります)かという区別です。三番目は，非連続な名詞にある区別で，単数が複数かです。

人は，まず，名詞が数えられるか，数えられないかを考えるという精神の働きがあるように思われます。次に，精神は，その同じ名詞を別の面から眺めます。このことは，すでに，du café /un café の使い分けとして，考察しました。原則的には，すべての名詞は，この分類の変更が可能です。数えられない名詞は，それに区切り(限界)を設けると，数えられるようになります。つまり，量(de la pierre/une pierre)とか，質(du vin/un vin de bourgogne, du courage/un courage admirable)を考えることによって。Marc Wilmet は，このことを，次のようにまとめています。注 4

離散的事物，数的表現：un cheval, des chevaux

離散的事物，量的表現：du cheval (= 馬肉)

高密度事物，数的表現：un vin, plusieurs vins (= ワインの種類)

高密度事物，量的表現：du vin

また，次の区別に対しては，敏感でなくてはなりません。つまり，その場の状況と総称との区別です。今使っている名詞が現実に存在している事物を表しているのか(時間と空間の中で，位置付けたり，さらには，触ったりすることができるかどうか)，それとも，その名詞は，その事物を心の中に思い描いたイメージ，観念，または，なにか非物質的なものかどうかを，理解し表現することができなくてはなりません。初心者が，この種の難しい問題に初めて出会うの

は、大抵は、動詞 *aimer* を使って、自分の好みや趣味を言うときです。

高密度事物の名詞の場合は、簡単です。その場の状況は、DU で表され、総称は、LE で表されます。離散的な事物の名詞の場合は、その場の状況は、UN または DES (特定しているのなら LE または LES) で表されます。LE にも、総称的用法があります。しかし、あまりに抽象的で、難しい用法なので、初めのうちは、学生には隠しておいて、LES の使い方を教えた方がよいでしょう。簡略化した表では、次のようになります。

その場の状況	総称
高密度 (j'ai mangé) DU wasabi	(j'aime) LE wasabi
離散的 (j'ai mangé) UNE/DES pommes	(j'aime) LES pommes

この表を用いると、難問を前にして途方にくれている学生にさえ *j'aime le lapin / j'aime les lapins*, *j'aime le français / j'aime les Français* などの違いを説明することができます。この表を基に、たとえば、*j'aime . . .* とか、*je mange . . .* とか、スポーツの場合 (これは、高密度事物で、動詞句 *faire de . . .* として使います) などの練習問題を、ほとんど機械的に解くことができ、名詞を分類することの必要性を、つまり、名詞は、その基本となる冠詞 (高密度名詞には、DU、加算名詞には、UN、抽象名詞には、LE) と一緒に覚えなければならないことを、学生達に分からせることができます。

1 - 6 穴埋め問題

教科書には、大抵、冠詞の穴埋め問題があります。それには、次の二種類があります。その練習問題の文が、状況、資料、明確で一義的なイメージを示している場合は、有益です。ただ、文脈のない文について考えさせる場合は、危険です。上で述べたように (*Vous voulez du café?* 参照)、同じ場面でも、様々な冠詞が適合することがあり、適切な冠詞を選ぶには、どうしても、文脈と話者の意図を考慮しなければなりません。

設問の例 *Vous avez bonbons?*

期待されている答えは、DES です。でも、この答えが正しいのは、店で買い物をするという文脈の中だけです。別の文脈を考えてみましょう。三人の人が、病人のお見舞いに行きます。その内の二人が、キャンディーを買ってくることになっているとします。三番目の人は、こう尋ねます。*Vous avez LES bonbons?* (つまり、持ってくるはずになっていた「あの」キャンディー)

別の例 *J'aime....cuisine italienne.*

期待されている答えは、LA です。でも、ある学生は、正しい答えを見つけているにもかかわらず、*cuisine* の下に、*kitchen* とメモしています。

ただし、この種の穴埋め問題を使ってもよいことがあります。それは、学生が、名詞と冠詞の意味を理解しているかどうかを確認するために、その文をある文脈に入れ直してみるようにさせる場合です。

2 文中の名詞

次の三つの文は、別の問題を含んでいます。いわゆる、文法的誤りはないのですが、文の構造が、日本語の影響を受けていて、なんだか変で、フランス人が書いたものではないことが、すぐに分かります。

(18) J'espère que vous êtes bien rentré à Gifu, et que la *fatigue du voyage* n'a pas été trop grande.

(19) Enfin je peux partir. La *date de départ* est le 27 juillet.

(20) *Le maximum de la température* était de 39 degrés.

これらの文の変な感じを消してみましよう。

(18') J'espère que vous êtes bien rentré à Gifu, et que le voyage ne vous a pas trop fatigué / que vous n'êtes pas trop fatigué / que vous n'avez pas été trop fatigué (par le voyage). . .

(19') Enfin je peux partir. La date de mon départ est le .../ je pars le 27 juillet.

(20') La température est montée jusqu'à 39 (degrés) / il a fait 39 / la temperature maximum a été de 39 degrés.

これらの文の共通点は、均衡がとれていないこと、つまり、非対称的であることです。Gustave Guillaume が指摘するように、「フランス語の論理では、意味命題 (semantese) は、言語の中で対立している二つの部分、つまり、名詞の部分と動詞の部分に均等に表現される傾向がある」のです。「フランス語の論理は、対称性の論理です。」注5

La *fatigue du voyage*, la *date de départ*, le *maximum de la température* などの例では、情報の主要な部分が、初めから、主題 (ここでは、主語) に盛り込まれていて、述語 (主題に付け加えられる新しい情報) には、たいした役目はありません。

この情報は、どの場合にも、名詞だけが担っています。『定冠詞 + 名詞 + de + 定冠詞 + 名詞』の場合は、二重にさえなっています。

連辞 (syntagme) の初めの名詞は、それを限定する次の名詞より具体性はありません。fatigue は、voyage より具体性がなく、date は、depart より具体性がなく、maximum は、température より具体性はありません。おそらく、学生達は、これらの連辞 (syntagme) は、決まり文句または決まり文句みたいなもの、つまり、観念だと考えたのでしょう。しかし、*fatigue du voyage* (旅行疲れ) という観念が言語に存在するとしても、それは、たとえば、le mal de mer (船酔い) とか l'âge de retraite (定年) の存在の仕方とは同じではなく、*fatigue du voyage* は、一つの言行為 (acte de parole) であり、そこに根付かせる必要があります。

初めの二つの文で、voyage と départ という名詞に、なおさら具体性がない、つまり、話者を考慮に入れた言行為の中に、十分組み入れられていないのは、それらの名詞が、動詞派生語 (二つの語は、それぞれ、動詞 voyager と partir の名詞化) であり、人から切り離されているように見えるからです。Votre voyage とか mon départ とか le maximum des températures だったら、「何か変だ」という感じは減るのですが。フランス語では、所有形容詞があまりに自然に感じられるので、なおさら、定冠詞が総称的に見えてしまうのです。(20)の文で、抽象名詞 “température” が、複数形だったら、具体性を持つことができたのですが。

この点については、おそらく、疑う余地はないでしょう。なぜなら、その学生達を書き記した文が、*la fatigue de votre voyage* や *le jour de mon départ* や *le maximum des températures* だったとすれば、私は、それらの文が、日本語的な考え方の痕跡を残していることに気づくことはなかったからです。それらの痕跡を、文中から見つけ出し、学生達に理解させ、正しく直すことは、困難な作業です。

注1 これらの指摘は、Franche-Comté 大学言語科学研究所の Jacques Montredon 教授の指導のもとで、日本人学生に対する冠詞の教育法に関して、現在行われている研究から借用している。それらは、特別、言語学的業績ではないけれど、様々なレベルの日本人学生に繰り返し見られる間違いを観察することによって、学習者の発想法上の諸問題を見つけ出し、その成果として、教科書や教授法の盲点を突くことをめざしている。さらには、可能であれば、このような間違っただけの言い回しが出現し、固定化するのを防ぐことをもめざしている。

注2 Francis Corblin, *Défini, indéfini et démonstratif (construction linguistique de la référence)*, Librairie Droz, Genève-Paris1987, p49

注3 Henri Bonnard, *Les trois logiques de la grammaire française*, Duculot, Bruxelles, 2001, p25

注4 Marc Wilmet, *La détermination nominale*, Presses universitaires de France, 1986, p50 - 51

注5 Gustave Guillaume, *Problèmes de linguistique théorique* de Gustave Guillaume, Presses universitaires de Laval, Québec, Klincksieck, Paris, p57